

近世名家書畫談二編

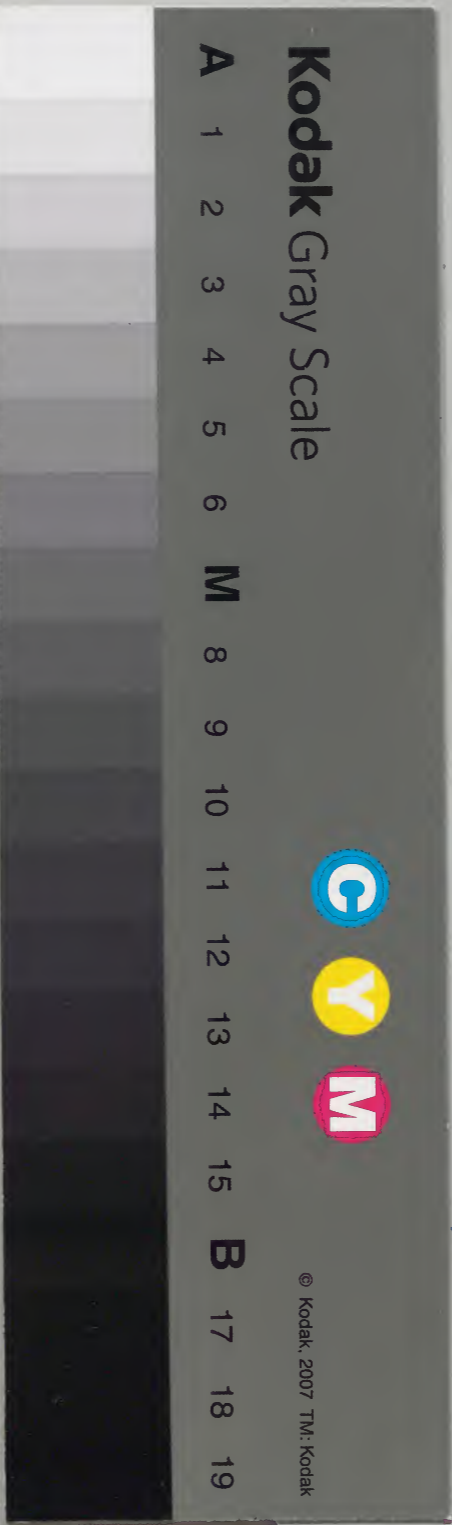
一

		一六九三	和
		二九三六	書
		一一九六	門
六	架	函	類
册		號	

庫	文	閣	內
九	一	九	和
八	方	三	書
二	九	六	
一	册	號	類
架			

內閣文庫	
番號	和 16936
冊數	6 (3)
函號	198 407

書畫文房三

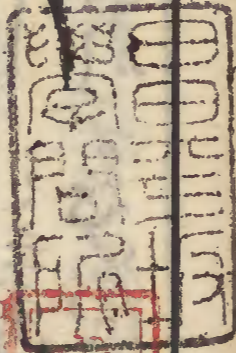
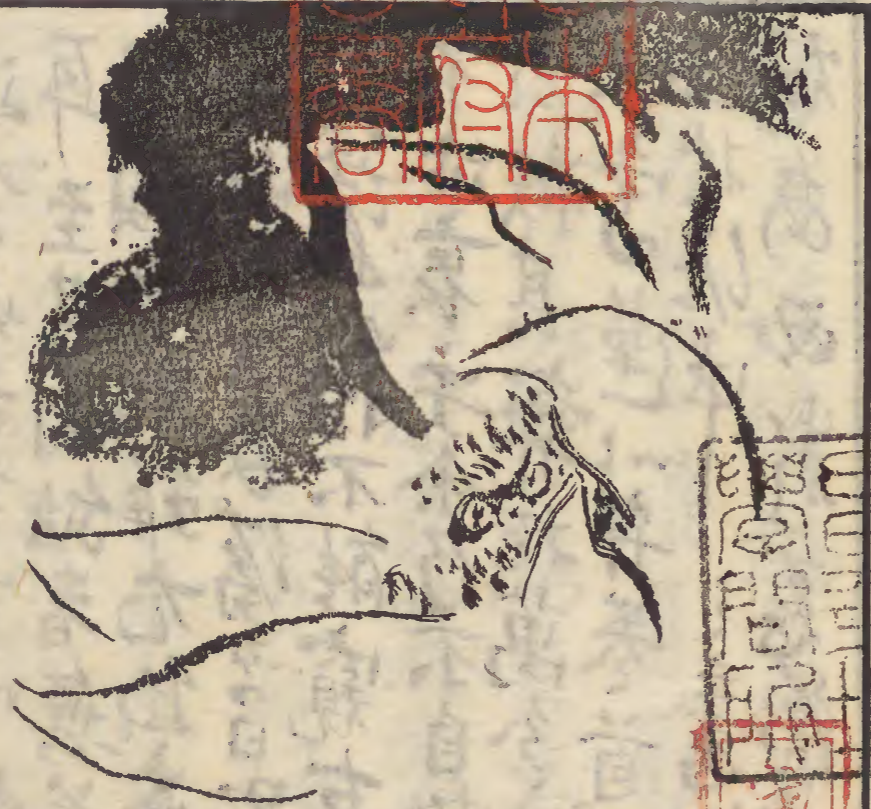
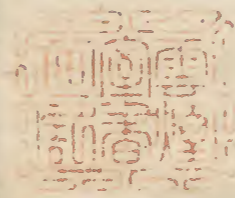


近世名家書畫談

二編全四冊

甲辰夏

雲烟子著并梓



雲烟子

能自潔

秋香丹

待風吹

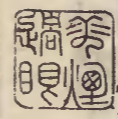
藝生

名家書畫談二編

自序

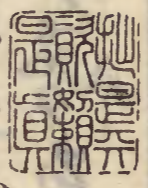
全

近人之好古書畫。唯觀之。其是求
 耳。至其剝蝕者。無若落款者。與此者
 不顯著。則雖尤物。素之如土芥。嗚
 呼。此風一長。偽者日眾。真者日湮。而
 後世將不能窺古人之精神。豈
 不亦哀乎。余乃不自揆。妄著此編。
 既救其弊。於萬分之一。因於椿山先
 生。字可蓮。以并卷首。亦所以見拾珠
 玉於泥中。之意也。甲辰冬
 烟安西於慈溪



書畫談續編序

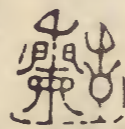
王逸少嘗謂。年在桑榆。彩絲竹
 以陶寫。此之濼矣。文拙。一色之
 娛。唯賴於暮春。事或可也。然
 狂為危險焉。况如強壯。假之為
 適。其不伐性自天。以玉蕩而為
 一可弗憚於素。勸業之士。鵝好學



學。年為母憂。心力弊矣。里一。旬。
以。盜。源。產。煩。抑。者。惡。乎。寫。也。
必。求。曠。襟。爽。懷。惟。一。室。清。林。之。
焚。香。淪。茗。法。亦。名。畫。交。互。展。
觀。有。此。靜。好。了。是。乃。尚。在。古。
人。可。載。之。且。為。道。之。其。樂。果。
何。如。哉。安。西。雲。烟。生。少。嗜。去。塵。

既深於法。賞。述。其。所。得。刊。布。之。
吾人幸親其後。今出餘蘊。嗚。余。
點。囊。因。翻。閱。如。次。崇。通。訓。高。
刷。嗚。余。翻。起。文。尾。今。老。多。如。得。
掃。一。室。玩。圖。之。優。勝。終。餘。年。
是。為。教。亦。善。耶。免。於。大。者。之。
嘆。何。必。用。字。之。輕。為。竹。節。也。

烟以冊視之。凡塵膠接。以溺石
利。注為不_以之徒。豈非醒_之疾_之
禁方仙丹也邪。是為_取發_神
嘉平月。程松老朽。漫月舟之人
筆于落後。孫之心。



書畫談續編序



作書畫難矣。然不若_下鑒書畫之_上。取難也。
何以言之。凡作書畫者。筆墨必良。縑素必
佳。而又有粉本法帖可以依擬。研_下指披_上
堅甲執利兵以臨_中乎陣。是以拙工劣伎。
亦或有_下奏其功者矣。至_上鑒書畫則不然。
蓋天下古書畫之夥。紛_下紜_上。不可勝窮。

而玉石混淆。真偽雜然。其所恃以鑒之。則唯一雙眼孔而已矣。此如夫有粉奉法帖可依據也。是猶挺身奮空拳以當百萬之敵。自非有得神機。豈能免于挫衄乎哉。吾友雲煙主人長手賞鑒。其於真偽。慧眼如炬。一睨無所逃。余嘗出家藏數幅。覆歛遙印。使其鑒之。片言奇中。

石不謬十。嗚呼。雲煙之得神機。誠可畏已。宜乎其以此伎馳藝苑。而無一人交鋒爭衡者也。往年雲煙泄其所得。撰名家書畫談二馬。其談奇拔。其論精確。能使讀者駭角稽首。而英悍之氣未艾。今又著續編四卷。其造詣之深。闡發之微。較之前輯。殆有加焉。謂之賞鑒之堅甲利

兵。不_レ可_レ手。夫甲兵之於神機。相去遠矣。然其堅利者。能使人勇武。則此編之出也。一安知_レ無_レ依_レ援_レ以_レ馳_レ騁_レ藝_レ苑_レ衝_レ突_レ文陣者。不_レ興_レ哉。余請張_レ瞻_レ而俟_レ之。

天保十五年甲辰抄秋油菴外史大橋

順撰



鼎齋生方寬書



近世名家書畫談二編卷之一目次

- 大意
- 鑑定論
- 半鑑の論
- 學者鑒定を誤る事
- 書画好小異同ある事
- 藥山紫山書榮悴の事
- 妙語時小不遇事
- 圖樣雅俗好の事
- 和歌連俳作意好嫌の事

附茶論

名家書畫談二編 卷之一目次

- 墓碣碑帖の事
- 真蹟の劣墨刻小勝る事
- 書画臨寫可謹事 附裝潢字義

○墓碣碑帖の事
 ○真蹟の劣墨刻小勝る事
 ○書画臨寫可謹事 附裝潢字義

近世名家書畫談二編卷之一

雲煙子 安西於菟編次

大意

唐羊士諤の句小畫披靈物態書見古人心と是書畫
 愛玩の真訣少て餘事と共ふ語るべし蓋し書畫ハ
 六藝の一なりて最上乘の好事なり故小古人も言聲
 詩養心術と云り自ら書画成作者能く體認せざれば
 温雅の趣成得む故小唐土の文士名家大家共皆此技
 小工あり然も共見地なく此技のこみ耽らば却て薄俗とあるなり

近世名家書畫談二編 卷之一

素より君子しんしに近ちかき遊戯ゆうぎは儉樸けんぱくの多おほし。こゝをば能よく其その道みちに知しる時ときハ此この好事こうじ小勝せうさつりる清娛せいぐ何なんや小人せうじんを閑居かんこして不善ふぜん小入り富足ふそくの身みに安やす逸いつ小居こゝき酒さけ小耽たり色いろ小溺なま竟つひ小性命せいめい短縮たんしゆくも自然しぜんの勢いきさあて此道このみち小多おほしよりななき故ゆゑあり此清娛このせいぐ以もつて小人せうじん富ふ有あの身みの淫樂いんらく防ふせぎ君子しんしの正道せいどう小誘いざなひ便たやすりとなさんこと可たがなり必かならず自餘じよの骨董こつとう姦猾かんわつの業わざと共とも小語ごることなるを

鑑定論

前編ぜんぺん既すでにんていの事ことに論ろんして宋湯垕そうたうけいが觀画くわんが六法りくはう

乃すなはちを舉あぐ又夏文彦げふんげんの看畫くわんがの法はうを録ろくすその條じょう小燈下とうげ小畫が紙し看みる處ところと云いふ是こゝ唐土たうど文人ぶんじん看畫くわんが乃すなはち規矩ききよ小こ尤なほかあるべきことなり我わが邦くにを惣むすて辨給べんきやう小こ持もち何なんと紙常しじやうと云いふ風ふうありて是こゝ而已のみ小て鑑定かんていの肯綮けんけい紙しあやま孰たしか所ところあり高陽山人こうやうしやうじんの言こと小學識がくしきあき目利定めりていままと云いふ又また學がく何なんと故ゆゑ小疑所ぎしよありて害がいとなることあるなり唐土たうど南北なんぼく共とも小文人ぶんじん多おほくして畫意がゐおのづから文意ぶんいあり我朝わがハ文人ぶんじんハ文人ぶんじん畫家が者しや流りゆうハ画家が者しや流りゆう各別かくべつなるゆ和漢わくわん雅俗がふく小徹底てつていなる小何なんとさバ觀くわんる處ところとす予前編よぜんぺん

或述一時ハいま此業小入るごとくして学者の説の或
 信ざり今既小業小入りて累年頗る切磋の功或積
 多る小学者の説の或も小も據るごとく又多く看る
 小も何れも能手の贋と拙作の真とハ實小毫髪の
 多るひも口舌小ハ説きざらく真の真なるもの贋の贋
 なるものハ一目瞭然として鑒者或まる處の或もこれを
 以て鑒定ハ實小一大事なりこゝ小又一説あり鑒定
 家而已小何れも萬子衆人より挙る時ハその言干
 里の遠き小達を然も共其業の能と不能と他人
 知らばその業小居る者ハ自然と知ることなり其実ハ

妄鑒を共尊崇の人これを用ひてバ愚者ハあつく
 信じて瓦を玉と玉を瓦とと真鑒といふ時小遇さば璞
 璧も瓦石と棄らる世小耳食と云る何れも古人所謂
 耳或貴ぶの弊除きざらく又精鑒小して真を贋と
 觀るあり漏鑒小して贋或真と觀る有り何れも精
 鑒といふ處の或も一多る贋の真となりてその精鑒
 小ありて贋と定まるありも何れも一真物の妄鑒り
 遇して玉を瓦と愚人小捨るまじハ至寶の泥中小
 埋没して黙さざるも多るん是ハ書画の或も何れも世
 上の事小於ても皆然り近世小わたりて上古も鑒

家小人物の偽有りこれハ天地造化の贋作と云ふも
 目力越人ハ誇りて世人ハ一隻眼あること城知れを常
 小疝氣ありて我意ハ随て真を贋と一贋を真と
 一系意ハ合ハざる人ありて是ハ時ハ真蹟ハ批難を
 くもよるふいり或ハ束脩の用意ハよることなど此類皆
 人物の偽ありて人道ハ何ら書画の偽物よりモ又
 甚一かりあるかくのごとく妄人ある由ハ真蹟の亦ハ埋
 毛迷贋作の至寶と云ふこと實ハ歎めはしきことなる
 ぞ也予かくいふと病狂喪心ハ何ら又按ハ文徵明
 先生の贋蹟を以真物なりと云はまじ一類ハ君子の心

術を見るふ是まじり
衡山先生 贋金 偽小精 一有り及は 吳中の人 其鑒定
 を求む小贋物を 真跡と云て 誑すること多かり
 此邦ハ探幽永真をどの鑒識をばくる
 小実ハ大名をなすべき人の所為なり 畠山牛菴古筆
 了佐まこれ小准む此輩ハ真を見て偽となし小
 量の人ハあらざるなり

半鑒の論

己迷鑒者なりと里小人ハ不鑒なる者多しとハ
 治世ハ生まざる人兵学を好み攻城野戦の法を
 暗記して我ハ勝敗存亡の機を得るは里ハ
 類なり昔戦國の時趙の國ハ趙括といふものあり

若年より兵法を學びて天下小己小勝なる者なりと
 思ふ時趙王是を用いて大将と一秦の國と戦ひ
 一小勝と成得む軍大い小破まじりて是は兵家の
 之小あつむ萬多亦志り醫師が論をよくして療治
 を能せざる相撲手哉よく知りて勝とを得ざる
 同一書画も時代傳記を知り或ハ花幅を以て收置て
 鑑定眞贋の所小いりてハ愚蒙なる人あり是性の
 ちのうらむる要ふして學びても至り難きや此心
 先生と崇めらる時ハ鑑定を乞ふ人あり極て已まら
 ざるを以て門弟子小示す由一果して誤ること多し

人の收蔵の眞贋を辨ぐるハいと安きことなり已まら收
 蔵せんと思ふ時ハいとくを以て鑑むる事
 なり又ある鑒者ありとかく印章の事を論じて眞跡
 ある紙も贋なりといふさまも絹統の類小押ときハ
 裝潢の仕方小より斜歪小なることあり又印色の
 善悪毛氈の之入薄席の之入を以て織洪の多小ハ
 まバ印のありき小て贋と定まらざる事あり又鑒
 家ハ印章なる事小その小いりてハ觀ることを得づる也
 上古ハ落款なる事少一骨董刀劍の之とく名小
 て賞鑒するハいづれ也當世利の爲とあり考小吠

るの徒のそて何そびとなるものなる故に無款にてハ
通用遠くなり一こそ何きゆ一も是故に古画今画共
小字落款まのハ商家の手も印を摸造一亦
そのまも多し是等ハ印あく共真跡なりとどと
画くべとく席上の兵法畠水練の徒の鑒識ハ大半
右の類なりとく共又難きこと小元あつて又易きふ
何ぞ樂まのハおのづから會得て

予ら友素原善我一則を示して曰夢溪筆談を
る小書画を論じて云藏書畫者多取空名為鍾王
顧陸之筆見者爭售此所謂耳鑒又有觀畫而以手

摸之相傳以為色不隱指者為佳畫此又在耳鑒
之下謂之揣骨聽聲下こそ當時書画を鑒定する
者の状私漢回一なりと見るべし揣骨聽聲ハ所
謂書画の形容を以て鑒識するその是なりこそ
より論を世間多く耳鑒何つて眼鑒はくなく
眼鑒は共亦神鑒なり甚我書画の一小
より猶くのごときこと

學者鑒定を誤る事

書画家儒醫歌誹諸家者流各その先筆の遺墨
觀て真偽を談ぶるあり是ハ無益の論なりと思ハる



南溟



雲之福也
鏡之其其物
心之其
叔翁言其旨
其心
為其便考坊

先鑒家と好事家との別なること茲知るべし知之者
 不如好之者好之者不如樂之者といふ其道なるを
 能く知るべきふあらず初年晩年中年の速いなり
 或ハ結構の常ハ異なり又ハ席書或ハ臨書あるは見
 る所ふすての揮毫或ハ蘭醉の筆跡千變萬化な
 り季書といふも十年以前ふしてハ我書とを思ハまぬ
 ことあり又他人ハ我書ハ倣うて書くるを見て實ハ我
 書なりといふことあり書畫成なるものハ已まらざる
 の外ハ觀ること茲得ざるなり鑒定家ハ是を樂し
 こと道を道とてころるを用る由一ふよくその変化

知るふいふこと固よりなり今時高名なる老儒先生ハ
 り其門下の書生常ハ古人の書を得て先生ハ鑒成
 乞ハ先生云予頗る書畫を花貯たまども他の真偽
 を辨むるふいふこと誰何某ハその道を得て能く真偽
 成識る彼小見せて定免しめて可なりと是その業の
 大なるを要する諸家の僻論を思ふその人の書すま
 文字あるまば真なるをを贋なりといひ其詩文の面々
 きふ會ハ贋なるをを真なりといふあり由一ふ贋作
 をなす者此ををさとて又能く校謀をなす贋
 成肆ふまふふいふ

予聞るるありある學者生きたき脾胃よく
して志を食好をくするが一時醫者のもとへ文
て今日鮭を人よりあかりあるが食してくから
どやとやあかりく小何くくくくくくくくくく
物小いと谷へくまばやくて調味して夥しく食ふ
惣身煩熱して四肢志きりふゆるくくくくくく
醫師通りくくくくくくくくくくくくくくくく
きくくく故是までハ多くくくくくくくくくく
成贈りくくくくくくくくくくくくくくくく
手紙をて尋りくくくくくくくくくくくくくく

食ハ多かれハ何の通りの苦くくくくくくく
成肉て眉小皺成よせ鮭成味嗜汁とハがてんちん
鰯を具ふ河豚汁なり是ハハハと驚くを亭主
くくく息のやよりそま鮭ハ河豚の一名俗誤て是
をさけと誤むさくハ正字鮭小くくくくくく
肥其子有ニ胞胞中数十粒呼曰鮠最前尋小進
ザハ正字と鮭のりなり文字を志くぬ医者ハ
やまきて思ひよくくく死をいふをありとくく
いハ文字ハくくくくくくく仕覚ハの業と青紙
の粉を氷ふくくくくくくくくくくくくくく

して別条なりしを文字知自慢小命をてんと
 する者あり本草を覚へて共其の毒域解れこと
 を知りある者あり是書画のことふ何らざるも茶話
 の一笑小備しべし鮭の河豚あることハ論衡炮炙論杯
 小見へあることあり志を遂げ書論画論を知りあること
 書画を見るときハ不識の書画屋小元及バざる處し
 或ハ博識を自負する人ありて多あり書家小あり
 てハ書論を難ト画家小會てハ書論を問ふ人あり
 共俗小云半可といふ者ありて筆墨を執てハ豈尋常
 の書画家小元及ぶる處きや

書画好小異同あり事

世人の珍賞する物先儒流をていへ惺窩羅山文山舜
 水藤樹伴齋祖來の諸先生を初として人奉て寶
 とて去る共其學風のことあるハその流派よりて違り
 物學を學ぶ者ハ閑齋學を呵て閑齋學をたれ共
 ハ祖來を誹る是世上の常なり去る共廣く儒流
 を好む人其差別なくその好品小會ハ買取て挿架
 とんて其ハ尊奉とハいど又好事の玩弄ある處し
 或ハ堀川派ばりを好むあり物派ありをよらふ
 あり是ハその門流を學ぶ者の收花する所あり其

他諸家者流皆かくのごとくその内儒流ハ奇跡稀ニ
して茶家の玩弄ハ遠く緇流ハ清巖江月翠岩
など人の尊ぶハ皆茶人の用とせざるを多ク其餘蘗山ハ
柳置月舟卍山盤珪無難極水白隱遂翁惠南師ホ
各高僧ナリ奇蹟ある人ナシバ茶家の珍賞トシキ物
ナシ共その時ハ遇ハズバ收花する者稀ナリ思ハ
世間の奇ハ吠る遺墨ナリハ俗家のモノ也合ハ
その奇迹を穿鑿せん人ナク其の去る故ナリトシテ
茶家の玩弄ハ遠く奇跡遊戯ハ其の善
を稱し徳を挙功成歎し奇を讚し己まは古人ハ

劣るモノ人をも善小進む魚とせざる心あり多きもの
そり実ハ真の好事者稀ナリ故ハ世ハ其の善
物の出ること遠く世人の之を以て品の中ニ又之れ
あるものを好むことハ多ク故ハ真の重寶と
するその少く世間通用の浅薄のモノト高價トス
事トハ多クナリ

蘗山紫山書榮悴の事

附茶論

禪家の高僧蘗山紫野の二派今時榮悴の勝劣を
先黄蘗ハ隱元木菴即非南源高泉悦山越始して
墨池家ハ獨立曼公大鵬唱浪道本ナリ各千里の

波濤を越 本朝小帰化して道德高きものなるが文
 累タガとし小兼具タガなり此諸賢の本邦小来る小あま
 只手跡のタガ舶来タガをタガつるの好品タガとすタガや大徳寺派
 みていタガ一休澤庵ハ性豁達タガしてタガ凡タガ小超タガありその余
 春屋玉室玉舟春澤江月清巖翠岩江雲江雪天祐の
 輩得道の浅深ハいタガなるや去タガど床頭小掛タガ筆
 を見タガど去タガ共利休宗旦古田金森小遠公タガなるの
 茶人皆此茶山小参禪タガ故タガおのつタガ茶道小も達
 せタガと見内故小壺の茶家専ら是タガ貴人タガで今
 茶タガ小與タガくタガ人タガもタガて賞タガする様タガ小なりタガ

書跡タガ亦稀タガなり予書画をタガ業タガしてタガ藤紫二山
 の書跡の遇不遇を見タガる小玉ハ埋タガりタガ尾の貴タガなる小
 似タガりタガいタガ予嘗タガて茶タガをタガ知タガりタガしタガりタガ
 阿タガも甲タガ小常タガ今の茶ハ古道小なる茶小阿タガも別小
 一種世事應接の茶タガとありタガなりタガ器物タガハ寶タガく
 たりタガなり書画ハ事實傳記を去タガりタガて只人の耳タガ近タガき
 を尊タガむタガ或ハ詩文の長タガくタガて解タガるタガハ客小失禮タガなり
 として俗用タガの書画を用タガるタガなりタガ小雅事を尚タガ習タガ氣
 なく一種の後タガ世茶の湯タガハ多タガと見えタガり茶事タガの原
 始を尋タガねバ俗意タガしてハ出来タガるタガとありタガ

茶ハ元來道を學ぶ者書を讀座禪をもる小睡魔
の侵れをさるんが為小喫せしを知識のころり小よりて
茶ハよく禪意小かをいころとて専ら禪機小より
式法を定免即悟道の一助とせしあり然るふつら
翫弄とありて東山殿の比益盛小なりしハ專ら翫
古の為のころり既小驕奢の意を生じ是が為小天
下の古器古董書画をこころり集め多しハ小あり
是ぞ是利家衰微の基とハありこれハ心得あるべき
ことありその後天心慶長の比ハ太閤殿下の機謀小
よりて軍事の用とありし其極小至りてハ利休を

罪きくるその思慮いともあり今太平鼓腹乃
亦代小ありてハ主客尊恭の禮儀とありその時小
老とくひてそまじく用をあらはと稔意も背の
むと云ふ一ささ其玩古の用ある時ハ浮費夥くし
て驕奢の害を生じ軍事の用ある時ハ疑惑の害生
じ尊恭の礼ある時ハ佞媚の害を生じ又貪
欲の害ハ各三つ小通じてまぬれざるなりそまじこれ
を稔家小用まじバ大小悟道の助とありと云ハ吾我
小して用る故あり京師の人ハ能く儉約のころり小
是を用るとしハ是ハ土地の風ありて無益の酒食小

代えてもちゆらなるべし。又是禅意の去りしむら
 小く全く害のふえり。江月清巖の書幅何の若
 小掛と云を去るべし。今世の茶人とかく珠光利休の
 革をとりしむらなるべし。多々茶意の古道は
 千手丹頂鶴。萬歳緑毛龜。茶人の書画の外は
 面白くしむらなるべし。茶席小用を画も又儒者の
 書あり共宋儒の径路或ハ李杜の詩句など書あるハ
 亦禅意小合ておそしむらなるべし。掛て用あり皆今ハ其用也
 魚き紙捨て捨べきを用也。是ハ故事より茶を崩し

茶より故事乃意を崩し。茶の茶多る。ことを去る。故
 事の故りしむらなるべし。或知むその巧拙を論せしむる。角
 世小少き茶の紙求むるハ笑し。魚きの甚しきことなるべし。
 びや予ある時清巖和尚法問の語を書き。横物紙
 壁間小掛多る小ある茶人來りて五字七字二行物中
 てほりきまるとしり。又ある時但來翁の五言一句書れる
 を儒者是を見て云る。惜むべし。何より小文字数少
 くして賞心薄し。詩みてをある文章も。或は全編
 みてほりきまるとしり。是その望み表裏ありて異なり
 其意如何なりや。去るべし。予今先輩小聞りある小因に

茶より小三害有るを論じて珠光利休の本意小復一茶道の淳素を失はざる事証祿のよのこ

妙語時小不遇事

予阿る時翠巖和尚の書き一涅槃妙心の一行物を茶人小見せざる小涅槃とハ死することなりて忌嫌より甚一按小涅槃妙心正法眼藏の語ハ禪家第一の心法なりて法善の妙法天台の中道實相浄土の弥陀佛真言の阿字本不生等のごとく此道也肝要の語あるを茶人の嫌ハぬ何る心より千年丹頂鶴萬歳緑毛龜などの淺俗小近きと日を目よりして語るべし福壽海無量ハ俗情小喜ハハ

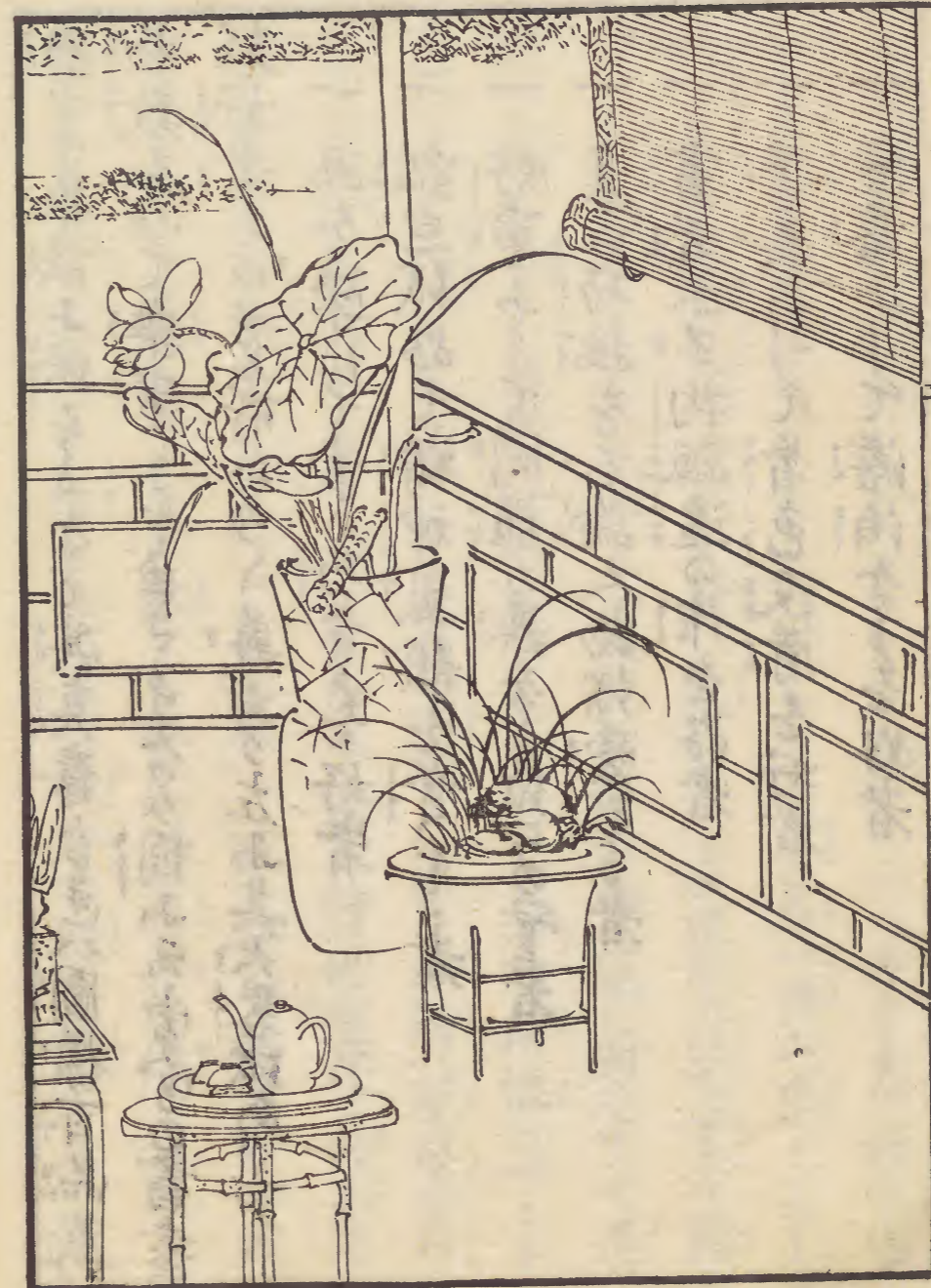
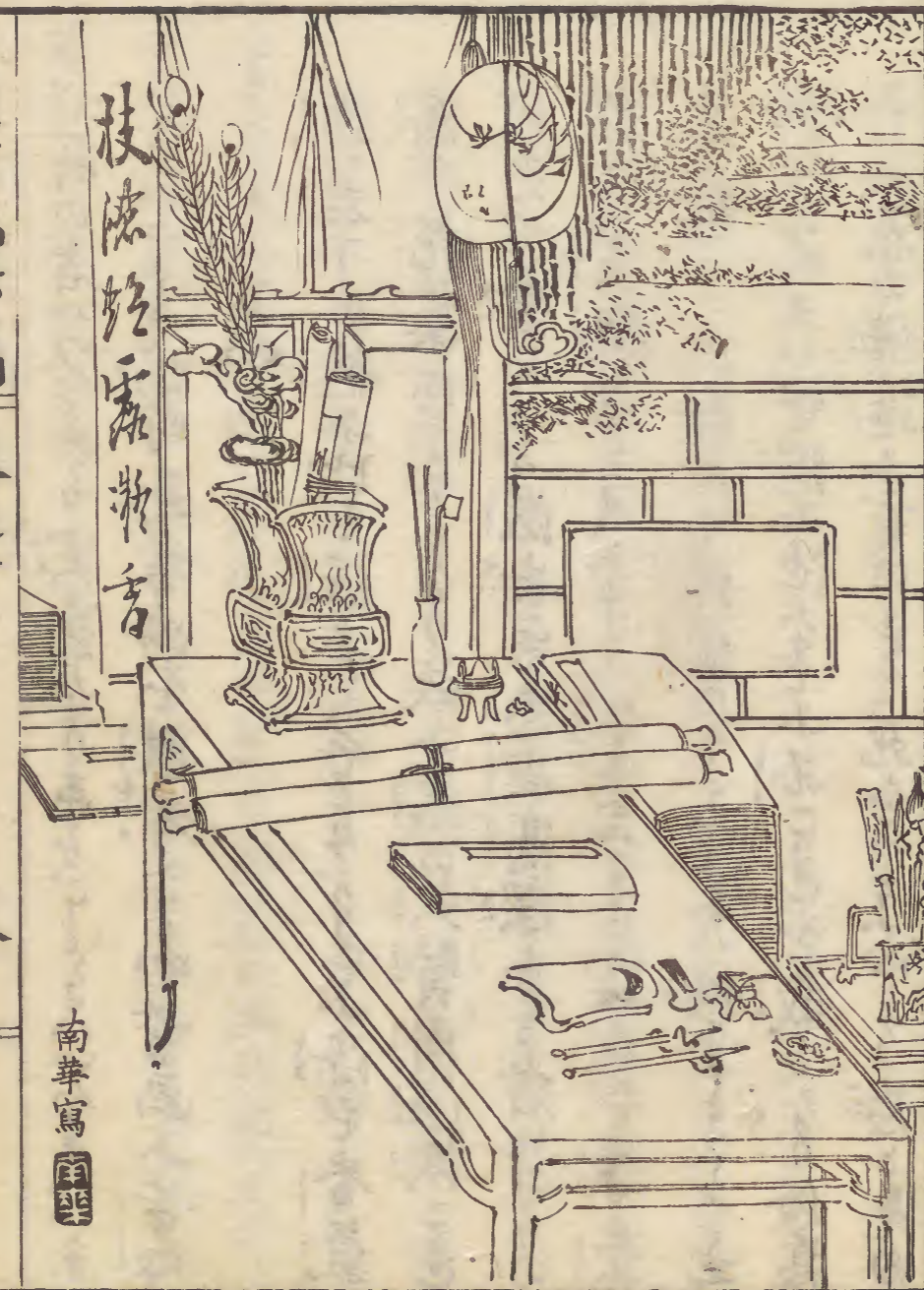
語なる共讀経小耳なるある故誰まきりよんわりの予又阿る家を訪ひ一人刀活人劍と書あるを五字一行なりてよくま古筆家の極をとり裝潢小錦繡を用ひて是城茶席小掛より主人云武士ハ人を活む者小帶刀せるとハよき悟りなりとして喜び不ろ一是ぞ禪家小所謂無心者と思ふべきをかりき此語を書ある禪僧殺の字を落すべき様ありころと云ふハ今世の茶人のきこむをそて姦商なるが裁きりて巧小裝潢せしそのおて殺人刀活人劍の妙語を損壞一ある大ひある罪なる一又予老友池田松石澤菴が書き一應無所住而生其心の一行

各格法ありて精神を窮乏なきに畫くことあり故に尤
肝要とするに委まらざるは一筆の席書一興ふ樂に多る
戲墨は面白しと云ふ時ハ孰も此道に學びて筆力精
神をつくむるものあるも一百年以前の画三幅對の中ハ道
釋の圖を畫し紙當今の意まで見ば寺院の掛幅のやう
思ふも是理りぞや一先書畫好事の法ハ或時ハ聖賢乃
像を掛て聖賢多しんこと紙欲し或ハ神仙道釋義勇の
像を各その域にせんことを欲し或ハ筆力精神の妙紙
見てハ已まざる業の不足を歎し或ハ山水花卉の優美紙にて
暢然として養心の術を思ひ或ハ同好の朋を請し茶紙

點じて雅談ふ供するを其真意なきに圖樣百品萬
物數を以て樂事と云ふべきを因ふ云當今の書畫
紙好者そのとる所おのゝ義あり左ふ其大畧紙あぐり
一 画を學びて業の巧なるを好者
一 鑑定紙好て精神風韻を賞する者
一 好事ふして圖樣の異なる紙の愛する者
一 業の巧拙を不論人物紙愛する者
一 畫者不不拘飄逸の作を好者
一 華美しして着色没骨を好者
一 灑落ふして澹泊なるを好者

枝法於露散香

南華寫
南華



右好所の者ハつゞきハ実者なり予がごときハつゞきは
このむふつゞき鳴呼是書画を樂者なり也書画ハ苦心
するそのあり也

蓮ハ君子の徳ハ比を泥よりつゞき不染也香氣
高く花葉ハざやのなり故ハ宋の大賢周濂溪こそ
越絶で愛する後世志尚高潔なる者皆この
花を賞觀するハなり一竺土ハもと此花を尊崇
する故ハ我朝ハ佛像のつゞきハ瓶ハもとて是
越つて祿又ハ寺院の池をよみ必こそを栽るなり俗意
ハ此花の佛邊ハ有越えて死をいつ心より忌と見ゆ

婦女小兒の見ふして男子もその心を清く徳を修る
氣象なきハ憐むるなり因ハ云豫樂院殿雪舟ハ画
る雅摩の大幅長二尺八寸横二尺五六寸也何れも
淨園の床子掛ハ何れもをかる大幅を何れも掛らる
ふ也何れも夜會の茶ハ古掛遊むるなり又四季
も極ハ文も或ハ月日など何れも時節相應ふ也一畫
圖夏ハ冬のみ冬ハ夏の圖ハかくることあり何れも
とあり又春の茶の湯會ハ日寛の葡萄の画ハ掛り
こと何れも賛ハ春雨の字ハ何れも紙も何れも
かふ名公の所為也何れも事なり

和歌連俳作意好嫌の事

今世和歌連俳を懐紙或ハ短冊とて賞玩する先哀
 傷歌或ハ戀歌或ハ述懐或ハ送別の歎紙嫌ハ又俳諧發
 白など詞のち小忌多きこと何と云ふ意ある紙嫌ハ
 こまあやむる甚きなり四時循環して暑往て寒
 来り真心の花を盛なるふらあつる人紙まねき衰つるふ
 つりてハ人さすて来どあるひハさつろの吹みて雨ふ去るこ
 風ふちさるあはささ紙思ハ暑の堪うう蚊のうるまは
 負き人のやうくふ渡ぐと紙思ハ秋の何れハあつる
 虫ハ感ハゆを落葉して鹿なく時のうつりゆくはる

ついでモあれをさるハなり和歌俳諧の真情といふを即
 ちのことぞ一貫之朝臣の述ゆハ愁傷愛慕戀その
 所ふつるさバ鬼神紙をうごう猛きばうふて哀まを
 ついこと紙あさる武士の心紙をうごうこと何なりと云
 定家卿小倉色紙のちを七かる當今の懐紙短冊好乃
 意ハ合意の志を共歌学者俳諧者流のハわる
 陋習ハ云ハさることあて皆聲小吠る徒尋常の茶人の風ハ
 化さす作意ハ世の小媚多きこと紙好ハ紙中の懐懐
 多るをバ廢する小至るなり実ハかたつりきことなすや
 後ハ真跡世ハつりて贋作のこの通用と云ふんといふ

先多とていそと其角が句ふ

せめてその貧乏柿ふ梅乃花

と是况味ある句なき共俗士びんがらうの貧乏といふ字あ城まま

志くまをちや城あが深川八負の中とて

米買ふ雪の袋あやなけり中

とこのは是も貧乏ハその句ふりやう多き共詞の上ふ何れあは

さればいこきあぬことなく人皆是城あよりこり吏あ登あが

腰ぬれのまふかあひる鳴子丸

とこの腰ぬけの五文字城忌嫌あなり是も真あ好あなる

誰人ハその况味を志りて賞あとまじも俗士の好あふ合あれ

ハ販買あの通用ハ遠あ一其真あ好あなる好あ家あのいそと世あふ

出あざるこそうとなき凡あそ人あの尊あ歎あ富あ貴あふ處あしてハ世あ情あ

ふらうと哀あまじといふことをさしり志ること難あき故あ小書あ城あ

よと道城あ学あびて人情あの向背あ世事あの變態あ城あえさしり

ことさあつて志あくまバ詞野あ鄙ああして逸あなるもの何あとま

みと感あずること皆道あふ入あるのはけりなり讚あ称あ慶あ賀あの詞あ

ハ大抵あ皆富あ貴あふして野逸あふとわく感あずる所あとく

昔齊景公大國小玉多る日の長久あなること城あ欲あ一死あなる

城あのなりと多あなる小側あふ何あり一史あ孔あ梁あ丘あ據あ諂あ諛あて共あ小

泣あくまバ晏あ平あ仲あハ獨あ笑あて死あ生あ去あ来あの道あ理あ城あさしり

景公大小慙多憂ひとなり人壽大凡七旬と定まるるを
 先五六十しして足るものあり然るに龜鶴の千萬ま羨まるる者
 その三分一を同トらん小の世の中大小といふものあり
 人よりその情理を知り安然として生涯しやうがいをあくりおはすの
 場ふ及んでハ帰路きよじのころして別わかれ驚おどろくべきものをいひて
 思おもはるる予まとて生なれ所しよふいふとてさきびつとて必かなく覺おぼ束つらなり
 萬物命数ありそのうち人ハ智ちある故ゆに四情深しよくよ
 智ちは情じやうを制せいすべし古人こじん龜鶴きよこは長壽
 成な尊たうふをまじ共とも鶴こハ食く成な少すくくして身み成な保たもち龜きよハ氣
 を吸すつて食くを飼かさるるをいひて云いふとてハ人の寡くわ欲よくや

て心こころ成な浩然げんぜん小養せうやうありといふ人ひとをまゐる龜鶴きよこのぬく後あと
 五十ごふして命いのち成な終つひ小せう極ごくき前定ぜんていの數かずありといふ清せい心しん省しやう憲けん
 て諸しよ欲よく成な制せい一いつ寡くわくせく百壽ひやくじゆを保たもちを至いたる極ごくきあり
 近世きんせい一茶いちぢや子こが辞こと世よの白しろとてア、まよよ生なてハ龜きよの百ひやく分ぶん
 とハあそりるきささりたりなり

墓碣碑帖の事

書しよ成な學がくぶ者もの先ま楷かい書しよハ虞よ世せい南なん廟めう堂たう碑ひ顔げん真しん卿けい多た寶ほう塔たふ
 碑ひ家か廟めう碑ひ歐お陽やう詢ゆん皇わう甫ふ府ふ君くん碑ひ九きう成せい宮きやう銘めい柳りゆう公くわん權けん玄げん秘ひ塔たふ
 碑ひ等たうの類るいを以もて善ぜんとて行ぎやう草そうハ二に王わう帖てい成せい始しとて玉ぎよ煙えん堂たう
 停てい雲うん館くわん戲けい鴻わう堂たうより以下いげ諸しよ法ぽう帖ていのぞる小せういと備びあり

篆書六李斯の嶧山碑李陽氷の三墳記以て第一の隸書ハ漢碑数百種夏承體二種のその小して曹全碑以て一と也唐碑ハ梁昇卿御史臺銘史維則大智禪師碑を善とい行書ハ李北海雲麾將軍尤佳品とい書法學ぶ者ハ碑刻以て一と法帖佳品ある然二といべし廣澤翁の以より安永天明間までハ碑本至て稀なりが文政中新渡船来して今ハ何れも採く志ること得たり又和帖墨本正面摺ハ近世予友杉本望雲あるその清法ハ倣ひ得て尤髣髴より実ハ文墨のひくくる時をまじりと云ふ志る小古碑墓碣銘ハ寺院の塔牌小等一きまのなる

書法學ぬ君子是哉机土小排置して和漢同一小珍玩を俗士の福祿壽或ハ千年丹頂鶴など採きて其を眼より見ハその身紙晋唐宋元の墓所小置小似ありと云ふ萬卷書開見古人といふ見識を俗意小する時ハ生前の人亡人紙友と云ふの心といふ聲一嗚呼雅俗の意懸隔かくのぬ

真蹟の劣墨刻小勝る事

真跡ハ至て稀小して又碑帖の及ぶ聲きま小何れも謝在杭云大抵真蹟雖劣猶勝墨刻之佳者といへり上古ハ姑置元朝以来趙子昂の書画尤贋作あび多し明小してハ唐寅吳寛ハ姑置文徵明董其昌の大家贋本幾百種と

つこしと諸書よいて世人の知る事なり故ふ文人雅士真蹟
の此土にありべきやうなりと云ふは理りなり然るに又云ふ
説ありると云ふ質なるといふ古其時代よして門弟子或は
能仿ふ者の傳寫なり又墨刻の佳なるも勝るものあり
是ハ手本と云ふも多る物なれば價小よりて枚数をきり
たり又墨帖といふも質本多きことハ此道の諸先生小問ひ
尋て知るべし

米庵先生之説也

書畫臨寫可護事

附裝潢字義

廣澤先生云米元章其花多る王羲之の真跡来禽帖
の事云々曾經人用薄紙搨書墨即透数行仍汗静

地深可歎息云云又云影書ハ尤大切ふべし黄硬紙を作
りて遊絲筆紙をて明窓小向ひて手のきく多る細心の人
寫さむと云ふと書画ハ尤く何れもきく多るなり又云書畫紙
表具なる紙裝潢装池とも云ハ四方小縁あるの稱なり池
淡もいけなり池ハ四方小堤あるなりと巻軸ハ掛物紙
横小見多る物なるは今の巻軸ハ甚略ふして書画紙愛
護する心ハかならんと云ふ

於菟按小裝潢の横紙淡池の義なりと心得て装池共
いハ誤りなりと云ふ
裝潢の横ハ上声 元來唐の六典ハ裝潢匠
横池の横ハ平声
といふ者何れ即ち今の 官府の表具師なり潢の字也

釋名小潢ハ染紙也といひ廣韻小潢ハ染書也といひて
 表具の時黄蘗の汁紙をて紙の色紙付ることなり是ハ
 蠹虫をどの生せぬ為なりとぞ故小六典の註小を装成
 而以蠟潢紙也と見内後の人新奇の説考一出して
 四方小邊ある故なりと云ハ牽強小近一此子ハ外庵外
 集真珠船をど小委一久辨一多まハ併を考ハ庵一

近世名家書畫談二編卷之一畢

